

神田久男先生の定年ご退職にあたって

心理学科長 芳賀 繁

2013年の3月末をもって、神田久男先生は立教大学を定年退職されました。本来ならば1年前に発行された「立教大学心理学研究」第55号にこの文章は掲載されなければならなかったのですが、退職教員を送る言葉は学科長が書くという慣例があり、神田先生がその年度の学科長だったために1年遅れになってしまったのです。定年退職が予定されている年度に学科長をお願いせざるを得なかった事情はいくつかあるのですが、その一つは私が前期に研究休暇をとっていたことであり、まことに申し訳なく思っております。その数年前にも私が急病で大学センター試験の監督ができなくなったときに代わってくださるなど、神田先生には助けられてばかりいました。

思えば心理学科全体が、ずっと神田先生に助けられ、支えられて来たのです。少なくとも私が立教大学に着任した1998年以降はそうだったと断言できます（その年の学科長も神田先生でした）。文学部心理学科時代は、専任教員の中でたった一人の臨床心理学担当として、毎年大勢の学部生、大学院生を指導し、心理学専攻が臨床心理士第1種指定大学院に指定されるために奔走されました。2006年度に現代心理学部ができてからは4年連続学科長の後、2年間学部長、そして最後の1年に学科長と、休む間もなく重責をお引き受けくださいました。

神田先生は1971年に立教大学文学部心理学科をご卒業の後、大学院に進まれ77年まで在籍、日本総合愛育研究所、淑徳短期大学社会福祉学科などを経て、88年から立教大学文学部心理学科に助教授として着任され、91年に教授に昇格しました。キャリアのほとんどを立教大学で積み上げて来たわけですから。

臨床家としてはイメージ療法・芸術療法の大家として著名ですが、家族心理学や青年期臨床心理学の研究でも重要な業績を残されています。神田

先生は最近の著書の中で次のように書いています：

心理治療とは、クライアントとセラピストとの人間的な出会いによって新しい関係を築くことにより、さまざまな問題や課題を一緒に解決しようとする相互の営みのことである。したがって、臨床心理学におけるパーソナリティの研究法や諸理論、それに治療技法といったものは、すべてこうした生きた臨床実践の積み重ねが礎になって生まれてくるといっても過言ではない。（『心理援助アプローチのエッセンス』 p.iii）

クライアントの表現を素朴に受け取ろうとはせず、まずはそれを理論的なカテゴリーにはめ込んだり、細かく概念化してとらえたのでは通り一遍の理解しか得られない。（同p.147）

これらの文章は神田先生の臨床心理学や学問全般に対する基本姿勢をよく表しているように思います。まだ臨床心理学専攻が心理学専攻の中にあつた時に、修論発表会などの席で、他の教員がともすれば理論的枠組みの欠如、概念定義の曖昧さ、統計分析の不備などを批判するのを尻目に、まったく違う観点から論文を評価しておられました。あるとき、「最近はこちらまりときれいにまとまったつまらない修論ばかり増えた」と嘆いていましたが、それは他の教員の指導に対する痛烈な皮肉だったのかもしれませんが。

神田先生が目指したことは、上手に論文をまとめるスキルを持った修士を育てることなどではなく、「クライアントとの人間的な出会いによって新しい関係を築くことにより、さまざまな問題や課題を一緒に解決」する力を持ったセラピストを育てることだったと、今更ながらに気づいた私です。